私の幼児教育論（その三）

――家庭と幼稚園――

佐藤文子

文化が進むにつれて、青年期が長くなると言われています。日本での最近の大学進学率は四〇％に近づいていますが、ストレートにいって大学を卒業するのが二十二歳、浪人とか留年をして二十五歳を過ぎてもまだ大学生という人も珍らしくなくなりました。一方、小学校就学前の教育も一般化して、幼稚園、保育所あわせて、施設保育を経験しているものは約八九％と、就学前一年の施設保育は、高校と同様、義務教育に近い普及で、二年保育、三年保育を受ける子どもの数も年々増加しつつあります。このように学校時代は上ばかりでなく下へも延長の傾向を示し、幼稚園を含めるとおよそ二十年間の学校生活を過ごすことになります。私たちの寿命も延びているとは言え、人生の四分の一ないしは三分の一を学校で過ごすわけです。

○

それでは、子どもにとって学校とはどういう意味をもっているのでしょうか。小学生、中学生、高校生、大学生、それぞれについて興味がありますが、ここでは幼稚園に限って考えてみたいと思います。

先ず就園の動機ですが、これは当然ながら親の意志によって決定されます。私たちが秋田県において幼稚園児（五歳児）の母親について行なった調査結果によると、子どもを就園させる動機は「家では与えることのできない集団的な生活を得させたいから」が八六％、「子どもの将来のためにはこの年齢から幼稚園にぜひ入れることが必要と思われるから」が四〇％で、この両者をあわせて教育的理由が一二六％となっています。「母親が安心して働くため」、「家で世話をする者がいないから」等保護的理由が二三％（これは秋田県の場合、農・山村が多く、農業をはじめ就労している母親が多く、またこうした地域では幼稚園と保育所の機能分

化が都市ほど明確でないということにもよります。）さらに「この年齢になるとみんな入るから」、「子どもが行きたがるから」、「人からすすめられて」等漠然とした消極的な理由が約六〇％になっています。マルチ選択ですので合計は一〇〇％をこえています。「子どもの将来のためにはこの年齢から幼稚園にぜひ入れることが必要」と答えた母親について、何故この年齢から入れなければならないのか、将来のために幼稚園でどういう教育が必要なのか、今回の調査では明らかにすることはできませんでしたが、「家では与えることのできない集団的な生活の体験を得させたい」と考える母親が八六％いることに注目しておきましょう。

都市化に伴って核家族が増え、きょうだい数が減少し、近隣に遊び友だちも少なく、また特に都市では安全な遊び場が近くにないなどの理由から、子ども同士の接触がどうしても少なくなりがちな現状で、幼稚園という施設で、集団生活を経験させたいという母親の気持ちは理解できますが、現実に母親が幼稚園に期待しているものは、もう少し別のところにあるようです。

○

私たちが行なった別の調査で、子どものしつけや教育に関する二十項目を選んで、それぞれの項目について、家庭での保育と施設での保育とでどちらが効果があると考えるか、幼稚園児の母親に、段階評定でチェックしてもらったところ、「同じ位の年齢の子どもと一緒に仲良く遊べるようになるには」、「思いやりのある子になるには」等の項目をはじめ「食事や着脱衣が一人でできるようになるには」、「食べ物の好ききらいをしなくなるには」、「病気をしない健康な子どもになるには」、「いらいらやかんしゃくがなくなるようにするには」まで、全ての項目について、集団保育の方が効果があるという方向に傾いているのです。その中で三歳児の場合、「文字や数を多くおぼえるには」が、家庭での教育の方が効果があるとチェックされているのに興味がひかれました。今回の調査は幼稚園を通して行ないましたので、幼稚園をたてているところが多少あるのかもしれませんが、ともかく、母親は子どものしつけや教育について、こうも全面的に幼稚園に依存しているのかと改めて考えさせられました。

一方、幼稚園の先生からは、「今の親は家庭で基本的な生活習慣のしつけもきちんとできないでいる」という苦情をよくきかされます。

それでは、幼児期のしつけや教育は施設保育の方が効果があると考えている母親は、今後の幼児教育の方向として、全面的な施設保育の方向へ進む、あるいは進むべきと考えているのかという

と、そうではないのです。先の調査で、幼稚園五歳児の母親に、将来の幼児教育の方向についてどのような展望をもっているかをたずねたところ、「幼稚園、保育所の施設でのしつけ、教育が大切になる」と考える親は一四％、「子どもを家庭から離して施設で全面的にしつけ、教育をするようになる」は二％で、「家庭でのしつけ、教育がますます大切になる」と考える者が五〇％、特に都市部にこのように考える親が多くなっております。同様に幼稚園の先生の四八％は「家庭でのしつけ、教育がますます大切になる」と展望しています。

さらに、しつけや教育における家庭と施設との役割分担については、母親の八三％が、「家庭ですべきことと、幼稚園でしてもらうことを区別して両者の協力が大切である」と考えており、「幼稚園にまかせきっている」は八・四％と少ないのです。

以上のように、母親の多くは、今後の幼児教育の方向として――そして恐らくは現在においてもたてまえとしては――「幼児期においては、家庭でのしつけ、教育が大切であり、家庭と幼稚園はそれぞれ役割分担しながら協力していく必要があり、幼稚園では家庭で経験できない集団生活の経験を得させたい」と考えながら、現実には、家庭ですべきしつけ、教育の多くをも幼稚園に依存しているということは、どういうことなのでしょうか。

都市化に伴う核家族の増加、そして子ども数の減少とも相まって、育児に経験がなく、自信のない母親がふえてきているあたりに、その原因があるのではないかと私には思われます。私たちの調査結果を手がかりに、また少し考えてみますと、母親の約半数は、家庭でのしつけや育児について、何らかの悩みをもっていると答えております。そして悩みの内容は、自立性・社会性（母親からの分離、反抗、わがまま、泣き虫、友だちと遊べない、良いことと悪いことの区別など）が七四％、生活習慣（食事の仕方、睡眠、排尿・便、清潔、あいさつ、衣服の着脱、テレビの見方など）が五〇％で主流を占めています。そして、悩みや困り事の解決のし方としては、「夫と相談する」七九％、「自分で工夫して解決する」一五％、「同居家族の育児経験者と相談する」二一％で、都市部においては、前二者が増加し、三番目の解決法が減少する傾向にあります。その他、「親戚や先輩知人と相談する」、「育児書をみる」、「ラジオ、テレビ、新聞などを利用する」も都市では多くなっていますし、「社会教育の機会を利用する」、「相談所などの専門家に相談する」などもあげられていますが、いずれも今、直接の解決には役立たず、「夫に相談する」と言っても、都市では日中夫のいない場合が多く、特に第一子の場合には、家族に育児経験者のいない核家族の母親は、育児に不安を感ずることが多

いのでしょう。そしてたてまえとしては、家庭で果たしえない機能を幼稚園でと考えながら、結局は、家庭で果たしうる、あるいは果たすべき機能をも幼稚園に移行するということになるのではないでしょうか。さらに前回述べたように、現代の家庭生活そのものが、幼児期の子どもに望ましい経験を与えにくいものとなってきているという事情も加わって、家庭の教育機能は弱化の傾向にあるのではないかと考えられます。

一方、幼稚園の先生には若い人々が多く、母親との話し合いが大切だ、時には母親教育も必要だと思いながら、つい遠慮がちになる、そして「今の親は子どもに基本的なしつけもしていない」、「こんなことは家庭ですべきこと」とぐちをこぼすことになるのではないでしょうか。

○

ここで母親教育について少し考えてみたいと思います。女性の大部分が母親になるのに、日本では、先にも述べたように二十年近い学校教育のカリキュラムに、母親になるための教育が——父親になるための教育も——含まれていないということも奇妙なことです。しかしまた考えてみれば、母親になるということは、単に知識を得て可能なのではなく、実際に子どもを育てるその過程で、母性も育ち、母親になっていくのでしょうから、学校教育の中に組み込まれるより、もっと別の形でなされる必要があるのかもしれません。

最近は、社会教育の方でも、母親学級とか乳幼児学級とか、乳幼児をもつ母親の指導、教育に力を入れてますが、私は、この社会教育の方法にも不満なのです。というのは、私の知る限り、社会教育も「講師の話をうけたまわる」ことで終る場合が多いのですが、家庭教育であれ、施設教育であれ、「幼児教育」についての学習は、もっと直接的体験学習であるべきだと私は考えるからです。

前回、発達段階説にふれましたエリクソンらによると、幼児期は、子どもが自律性と主導性を獲得する大切な時間です。この時期に、排泄をはじめ基本的生活習慣が確立し、子どもは自分の体を自分の意志でコントロールすることができるという自信を得、それに伴って自律心も育ってきます。また歩行や言語の発達に伴って子どもの世界は拡大し、自分から進んで新しい世界を探索し、世界とのかかわりを深めていきます。家庭でのお手伝いなどを通して家族の一員としての自覚をもつこともまた、自律性、主導性の発達を促します。

一方、ピアジェらによる認知面の発達説からみると、幼児期に

は、心象が形成され、象徴的思考が可能となります。そしてことばが代表機能を獲得するようになり、次第に論理的思考に近づいていきます。しかし具体的状況の束縛から離れて安定した論理的思考ができるようになるまでには、対象の世界と身体運動的にかかわる長い過程を経なければなりません。最近の母親は、子どもが身体を動かしながら世界とかかわっていく過程で世界を知っていく、この学習の意味を十分理解していないようです。母親が「文字や数の指導は家庭で指導した方が効果的」と考えるのは、いつまでも文字や数そのものを指導してくれない幼稚園にじれったさを感じるからでしょう。

私は最近、いくつかの幼稚園で発達検査をする機会がありました。その中の「判断—常識」の下位検査に「自動車の通る大通りを向う側へわたる時はどうしますか」という質問があります。五歳児の多くは「信号を見てわたる」、「手をあげてわたる」、「横断歩道をわたる」、「右見て左見て、もう一度右見てわたる」などと答えます。最近は幼稚園で安全教育、特に、交通安全の指導には力を入れています。入園当初には警察官にも来てもらったり、また交通安全の歌が園内に流されたりもします。そして子どもたちは「右見て、左見て、もう一度右見て……」と覚えます。しかし交通規則を暗記することで、交通安全の指導は完成するのでしょうか。

ある幼稚園の先生が英国を旅行した時、一人の英国人が信号が赤なのにスタスタと道路を横断したそうです。日頃幼稚園で子どもたちに口をすっぱくして「信号が青になったらわたるのですよ」と指導している日本の幼稚園の先生方は、信号が青になるのを待ってわたり、先の英国人に、「英国では信号を無視してもいいのか」とたずねたそうです。そしたら、その英国人が「あなた方は子どもなのか」と問い返したということです。

私たちは信号が青でも、もうすぐ赤になりそうな時に、距離のある道路をわたるのは止めて、次の青まで待ちます。また信号を無視して突っ走ってくる車がある時には、信号は青でもこちらが身をかわさなければ危険です。

交通規則を知り、それを守ることはもちろん大切ですが、それに従うと同時に、自分で状況を判断し、適切に行動する判断力と身のこなしができなければ交通安全教育は十分と言えません。そしてこのような判断力と身のこなしを学習するのには、交通規則を覚えるよりも長い時間がかかります。

最近は、多くの幼稚園がスクールバスで園児を送迎しています。そしてスクールバスのない園では親に子どもを送迎させているところが多いのですが、この場合も自家用車や自転車で送り迎

えすることが多く、通園の途中に交通安全の訓練をするということができにくくなりました。また、たまに徒歩で、あるいは公的交通機関を利用して通園していても、その途中で、子どもに交通安全の習慣が身につくような指導をしている親は非常に少ないようです。私たちの大学の附属幼稚園の先生が、かつて、母親が通園途中に子どもに交通安全の訓練をするように、その段階的指導のカリキュラムを立てて親に示しました。それは、第一段階は、親が子どもの手をひき、信号のところにきたら「さあ、青になったから、右見て、左見て、大丈夫だからわたりましょう」と親の判断を子どもに確認させる。次の段階は親と子どもと一緒にいて、子どもに判断させ、子どもが大丈夫といったらわたる。次には、子ども一人に判断させ、わたらせ、親は一歩退いて子どもの行動を見ている……というように、段階を追って指導するようになっています。しかし降園時に、先生が親から見えないところで親子の姿を観察していると、カリキュラム通りに指導している親は殆どなく、入園当初は親が子どもの手をひいて、親の判断で、子どもが不安に感じようと子どもの気持ちにかかわりなくひっぱっていく。少し馴れてくると今度は子どもは親から離れて自分勝手に歩き、親はまた親同士で話しながら、たまに車でもくれば、「ほら危ない、気をつけて」で終り。結局、最後までカリキュラムに従って指導したのは、クラスの中で一～二名だそうです。そしてこの一～二名の母親は、子どもの生活指導全般について非常にしっかりしていたそうです。

母親教育のポイントは、母親が意識的、無意識的にしている行動が子どもにとってどんな意味をもっているのか、そして子どもの行動はどんな意味をもっているのか、行動に表わされた子どもの気持ちを母親が理解するよう援助することだと思います。このような観点からみると、大切なことは、育児書を単に知識として読んだり、家庭教育を放棄して子どもを幼稚園におまかせするのではなく、母親が自分自身の姿を見ることのできる鏡をもつことだと思います。かつてのよいお姑さんはこの鏡の役目を果たしてくれていたのではないかと思います。核家族の中で育児経験者との接触のない若い母親が母親としても成熟していくためには、子どもだけの集団生活と平行して、母親と子どものペアが、育児経験のある者、ない者も含めて、集団である時間を過ごし、交流し合うことによって他の母親の姿を見る、また子どもに対する自分の態度は他の人々にはどのように映じているのか、互いに率直に意見を述べ、きくことよって自分自身の姿、そして子どもの姿を、正しく把えていくという方法が効果があると思うのです。これが理想的な形でできなくとも、幼稚園での母親参観の方法等ももう

少し工夫できないものかと考えます。

○

欧米の、そして日本の発達段階説は、従来家庭における人間関係を基本として組み立てられてきました。先ず初期の母親的人物への全面的依存の段階から、やがて母親からの分離、そして親による社会的規制、秩序への関係づけ――いわゆるしつけ――が行なわれ、また第一次集団である家族の中で役割習得がなされ、そして次第に近隣、幼稚園とその準拠集団を拡大していくのですが、三歳から就園するとなると、母親からの分離と同時に、家族という第一次集団における社会化と同輩集団における社会化が平行して進むことになります。乳児期からの集団保育を主張する人々もいます。しかし就園の低年齢化は、必ずしも理論的に進められてきたものではなく、社会的な要求が先行してきたというのが現実のようです。家庭と施設の教育機能をどのように調整し、役割分担したらよいのか、実践的にも理論的にも、幼児教育の今日の課題と言えそうです。しかし制度的に、あるいは理論的に整理されるのを待っていたのでは、そして母親と幼稚園の先生が互いに、「それは家庭の役割りだ」「幼稚園ですべきだ」と言い合っていたのでは、結局は子どもの成長、発達に大きなぬけ穴をつくることになります。さし当たっては、現状において、一人一人の子どもに今何が欠け、どんな経験が必要かを、幼稚園の先生は幼児教育の専門家として見きわめ、それをどこで与えるか、親との話し合いによって解決していく、そしてそのような結果に基づいて具体的な提案をしていくことが、幼児教育の進歩改善につながるのではないかと考えます。（つづく）

（秋田大学）

（文中に引用した調査研究は、秋田大学教育学部教官による共同研究「都市化の幼児教育に及ぼす影響の実証的研究」――研究代表者佐藤守、昭和五十年度「財団法人トヨタ財団」の研究助成による――の一部です。その詳細については、秋田大学教育学部研究紀要教育科学 vol. 26 に記されています。）